

2025年度

ヒューマンライツ

— 差別のない明るい大町市をめざして —

人権教育作品集 (第48号)



大町市教育委員会

まえがき

「人権」とは、人間が幸せに生きていくために、誰もが生まれた時から持っている固有の権利です。しかし、現代社会では、生活様式や価値観が急速に多様化してきました。今、わたしたちは数多くの人権に関わる課題に直面しています。同和問題や外国人の人権差別、男女共同参画社会の構築、いじめや児童虐待等の子どもの人権問題、高齢者や障がいのある人の人権問題、性的少数者への理解不足、SNSなどネット上でのバッシングや炎上などの人権侵害、職場でのハラスメント、感染症に対する偏見差別など、様々な人権問題をかかえています。今後も社会潮流の変化に伴って新たな人権問題が起ってくるでしょう。

こうした情勢にあるからこそ、一人ひとりが人権に対する認識を深め、安心して生活できる地域づくりが必要となります。各学校においては、あらゆる機会を通じて人権教育が実践され、課題への計画的な取り組みを行ってきております。ここに掲載した作品は、いずれも感性に富み、純真な感覚で人権問題を捉えた素晴らしいものばかりです。学校生活や日々の生活の中で体験し、感じたことを通して、「差別の不当性に気づき、差別を許さない」という素直で率直な気持ちが表れています。

様々な場面で、この作品集を人権教育の資料としてご活用いただき、人権尊重への願いが、学校・家庭・地域全体にいつそう広がることを期待しております。

令和八年二月

大町市教育委員会

目次

ポスターの部

(学年別)

● 小学生の部

大町南小学校 一年	太田 結月	5
大町南小学校 一年	川原 みり	5
大町南小学校 一年	矢口 朝陽	5
大町西小学校 二年	小口 春乃	5
大町西校学校 二年	西山 湊結	5
大町南小学校 三年	松本 帆夏	6
大町南小学校 三年	山下 陽子	6
八坂小中学校 三年	川面 紗彩	6
美麻小中学校 三年	松下 天愛	6
美麻小中学校 三年	田中 照子	6
美麻小中学校 三年	酒井 遥絆	7
大町東小学校 四年	横澤 紬生	7
大町西小学校 四年	吉澤 來遥	7
大町西小学校 四年	荒木 満衣羽	7
大町東小学校 五年	高橋 双葉	7
大町東小学校 五年	富田 拓磨	7

大町東小学校 五年	藤浪 優	8
-----------	------	-------	---

大町南小学校 五年	平川 苑	8
-----------	------	-------	---

大町東小学校 六年	一木 真代	8
-----------	-------	-------	---

大町東小学校 六年	中山 琴音	8
-----------	-------	-------	---

大町東小学校 六年	渡邊 響	8
-----------	------	-------	---

大町西小学校 六年	太田 恵夢	9
-----------	-------	-------	---

大町西小学校 六年	宮田 うの	9
-----------	-------	-------	---

大町北小学校 六年	丸山 莉奈	9
-----------	-------	-------	---

大町北小学校 六年	木村 美桜	9
-----------	-------	-------	---

大町北小学校 六年	北澤 璃恩	9
-----------	-------	-------	---

大町北小学校 六年	高橋 漸	10
-----------	------	-------	----

大町北小学校 六年	西澤 和	10
-----------	------	-------	----

大町北小学校 六年	竹内 真翔	10
-----------	-------	-------	----

● 中学生の部

八坂小中学校 七年	佐藤 裕有	10
-----------	-------	-------	----

八坂小中学校 七年	坂口 瀧英	10
-----------	-------	-------	----

● 表紙

大町北小学校 六年	北澤 璃恩	7
-----------	-------	-------	---

作文の部

(学年別)

小学生の部

きんばらさんへ	大町西小 一年	松本 二瑚	11	協力することができた音楽会……	大町東小 五年	島田 稜生	17
きたざわひろしさんへ	大町西小 一年	丸山 莉瑚	11	キャンプファイヤーの企画……	大町東小 五年	松田 彩菜	17
ゆうまくんがうまれたよ	大町北小 一年	岡沢 優一	11	外国の人とどう付き合うか……	大町西小 五年	今村 柊登	18
東小さい	大町東小 二年	長山 茉央	11	傍観者……	大町西小 五年	金原 旭	18
大町東小学校二年生と友だちになったよ	大町南小 二年	今福 拓真	12	思いやりに気づいたバドミントン……	大町北小 五年	窪田 彩加	19
みんながなかよくなる大きくせん	大町南小 二年	両角 權	12	みんなと仲良くするために……	大町東小 六年	麻田 希愛	20
しょくぶつのかんさつ	大町北小 二年	北原 楓	13	あいさつをしよう……	大町東小 六年	須澤 一鶴	20
やさしいも交流会	大町東小 三年	星 愛乃	13	自分が自分らしくいるために……	大町南小 六年	服部 陽菜乃	21
かみさまからのおくりもの	大町西小 三年	北澤 優羽	13	いじめをなくすために必要なこと……	大町南小 六年	太田 陽梨	22
本当の友だち	大町西小 三年	宮田 蓮	14	友達といること……	大町北小 六年	田中 壱青	22
アイマスク体験をとあして	大町北小 三年	西山 和里	14	これまでのほくとこれからのほくと	大町北小 六年	降旗 遙生	23
親切はうれしい	大町東小 四年	山口 由希菜	14	「男らしさ」「女らしさ」に			
しょうがいを乗り越えるための工夫	大町南小 四年	手塚 心結	15	とらわれないために……	八坂小中 六年	前波 陽向	23
不自由な人との関わり	大町南小 四年	浅野 花帆	16	インターネット上の誹謗中傷……	八坂小中 六年	北澤 周	24
行動に表す	大町北小 四年	竹折 心結	16	いじめがなくなるには……	八坂小中 六年	仁科 輝也	24
再編したら友だち作り	大町北小 四年	浅川 和樹	16				

● 中学生の部

誰のため……………	大町中二年	中島愛梨	25
共生を大切に……………	大町中三年	平林明依	26
「自分らしさ」って?……………	八坂小中八年	仁科あいる	27
フエイクと自由……………	八坂小中九年	高橋宏壮	28
誰かを幸せにしたら自分に返ってくる……………	美麻小中七年	上田乃愛	28
想像でしかなかったことが……………	美麻小中七年	佐藤朝陽	29

● 高校生の部

人権教育を受けて……………	大町岳陽高校一年	中沢千咲	30
あの花が咲く丘で、			
君とまた会えたら……………	大町岳陽高校一年	谷川結愛	30
映画を見た感想……………	大町岳陽高校一年	山岸蒼空	31
相手の気持ち……………	大町岳陽高校二年	藤原悠莉	32
今こうして生活できること……………	大町岳陽高校二年	赤羽瑠実	32

小学生の部



大町南小 一年 川原 みり



大町南小 一年 太田 結月



大町南小 一年 矢口 朝陽



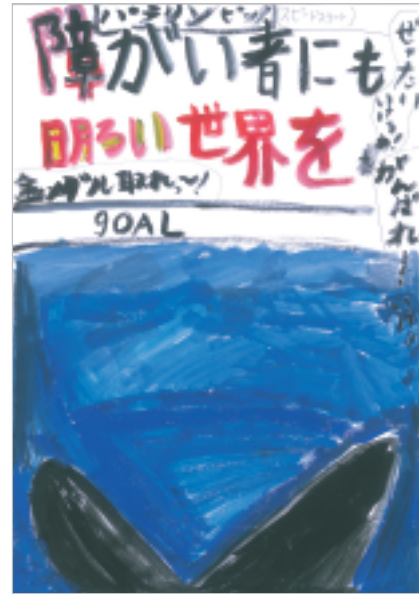
大町西小 二年 西山 湊結



大町西小 二年 小口 春乃



大町南小 三年 山下 陽子



大町南小 三年 松本 帆夏



八坂小中 三年 川面 紗彩



美麻小中 三年 田中 照子



美麻小中 三年 松下 天愛



大町東小 四年 横澤 紬生



美麻小中 三年 酒井 遥絆



大町西小 四年 荒木 満衣羽



大町西小 四年 吉澤 来遥



大町東小 五年 富田 拓磨



大町東小 五年 高橋 双葉



大町東小 五年 藤浪 優



大町東小 六年 一木 真代



大町南小 五年 平川 苑



大町東小 六年 渡邊 響



大町東小 六年 中山 琴音



大町西小 六年 宮田 うの



大町西小 六年 太田 恵夢



大町北小 六年 丸山 莉奈



大町北小 六年 北澤 璃恩



大町北小 六年 木村 美桜



大町北小 六年 竹内 真翔



大町北小 六年 西澤 和



大町北小 六年 高橋 漸

中学生の部



八坂小中 七年 坂口 瀧英



八坂小中 七年 佐藤 裕有

「わあ」

って言うことにしました。おきやくさんのリアクションがおもしろかったです。

大町東小学校二年生と友だちになったよ

大町南小学校 二年 今福 たくま

十月二十二日に大町東小学校の二年生と交りゆう会がありました。六月に二回をやったので、今回は、二回目です。

一回目の時は、はじめて会う友だちだったので、ちよつと、きんちようしてしまいました。だから、あまりしゃべることもできなくて、なかよくなることができませんでした。

二回目では、大町東小学校のAくんとすべになかよくなることができました。なぜ、なかよくなれたかというところ、大町東小学校の二年生が考えてくれた「カモン」という遊びをしたとき、Aくんとおなじはんになったかです。いっしょにゲームをしているときは、はずかしかっただけと思いい切って、ほくから、

「友だちになろうよ。」

と言いました。すると、Aくんは、わらわら

「いよ。友だちになろうよ。」

と言ってくれました。ほくは

「やったあー。」

と思いました。

そこから、二人でなかよくゲームをしました。ゲームも楽しかったけれど、Aくんと友だちになっていっしょにやれたから、さいこうに楽しかったです。

ほくは、思い切って、

「友だちになろうよ。」

と言ってよかったなあと思いました。

大町東小学校の二年生とは、来年、南部小学校でいっしょになります。今回の交りゆう会で友だちもいっしょにできました。来年、三年生でいっしょに生活するのがとても楽しみです。Aくんと同じクラスになればいいなと思います。そして、またいっしょにあそびたいです。

みんながなかよくなる大さくせん

大町南小学校 二年 西角 かい

ほくは、みんながなかよくなるためには、一人ひとりがちよつとでもいからゆるる気もちをもつことだと思います。

ほくが休み時間にプールのルームで、ドッジボールをやっていたときのことです。ほくの近くにボールがころがってきたので、ひろってなげようと思ったら、となりにいた友だちも、同時にボールをひろいました。ほくはちよつとだけなげただけで、

「友だちは、あまりなげないし、とてもなげたそうだし、ほくは、さっきなげただから、ゆるってあげよう。」

と思っ、

「このボール、いいよ。」

とボールを友だちにゆずりました。すると、その友だちは、

「ありがとう。」

とえがおで言うてくれました。そして、すごく楽しそうにボールを投げていました。その時、ほくもすごくうれしく、いい気持ちになりました。そして、前より、友だちとなかよくなったような気がしました。

ほくは、あいてのことを考え、ゆるる気もちを持つと、あいても自分もとてもいい気もちになり、もっとなかよくなりやすいんだなあと思いました。

みんなが、あたがいゆるり合えれば、みんなもつとえがおになれるし、

やさしい気もちにもなれると思います。これからも、ゆずり合う気もちを大切にしたいと思います。

しょうぶのたんぽぽ

大町北小学校 二年 きたはら かえで

生活のべんきよつで、今まで朝顔やミニトマト、大ずをそだててきました。どれも小さなたねからそだてました。大ずはちや色のみになって、ミニトマトはつるつるした赤いみになって、朝顔は、だんだんとつるがのびてやつときれいな花がさきました。

あんなに小さかったたねがだんだん大きくなったのは、しょくぶつも人間と同じようにいのちがあるからだと思います。人間も、いのちがあればどんどん大きくなっていきます。だから、しょうぶつにもいのちがあるのだと思います。

前はきれいな花を見るとすべとすべといたけど、しょくぶつにもいのちがあると考えはじめてから、生えている花をこらさないようになりました。これからも、もっとしょうぶつをかんさつして、大じにしながら生活していきたいです。

やきいも交流会

大町東小学校 三年 星 愛乃

十一月七日にやきいも交流会がありました。

ボランティアの方々が、あいもをやってくれている間、三年生と五年生で遊びました。

今回は、三年生が遊びを考えて、おにぎりごとじゃんけん列車をやりました。あいもをやるのに少し時間がなかったけど、三年生が考えだきかく

は、楽しくてうれしかったです。

やきいもは、中がほかほかだったし、うまくやけていて、すいんあいてかったです。

もう一度東小でやきいも交流会をやりたいけど、もう四月へくはうしかのこりがないのでできません。

あいつこのやきいも交流会は、今までで一番楽しいやきいも交流会でした。

「東小さうじの思い出のいん、楽しいやきいも交流会でいひひ。」このスローガンが、たっせいできました。

みなさん、ありがとうございました。

かみさまからのおくじも

大町西小学校 三年 北澤 優羽

わたしには、六才下のいとこがいます。ひびきくんはいつも、わたしの物をほしがるし、言ったこともまねします。なので、すべけんかになります。そういう時、わたしは、いやな気持ちになつておついでです。

でも、ひびきくんがいにめられていると、悲しくて泣いちゃいます。

あともう一人、〇才の妹がいます。すいちゃんは、いつも泣いてばかりでとても大へんです。でも、すいちゃんが泣いてくると、わたしはすいちゃんのことをとんとんします。泣き止んでくれない時もあるけど、泣き止んでくれた時は、すいんうれいです。

わたしも、小さいころこつこつうぶつに育ててもらったんだなと思うつうれしくなります。すいちゃんとおひびきくんにもやさしくしたいです。

本当の友だち

大町西小学校 三年 宮田 蓮

本当の友だちとは、「きずな」があつて、困った時にいっしょにやれたり助けてくれたりするものだと思います。だから、けんかをしても仲直りができなかつたり、「コメンネが言えなかつたりするのは、本当の友だちではないと思います。

人のことや相手のことを思つて動いてくれたり、何かをしようとしてくれる人が、本当のきずなでつながっている友だちだと思います。

ほくは、「仲間」という言葉をよく聞きますが、「仲間」とは、ただいっしょに遊んでいるから「仲間」なのではなく、本当の「仲間」とは、相談ができたり、おたがいにうら切つたりしない、思い合える友だちのことをいふのだと思います。

金曜日の道徳の授業で先生が話してやってみた「クチャクチャにした紙」は心と同じで一度キズがついたら元にもどせない、ということがとても強く心に残りました。

ほくは、これから本当の友だちを大切にしていけるように、ふざけて心をきずつけるようなことを言つたり、友だちがいやがることをしたりしないようにしていこうと、改めて感じました。

アイマスク体験をとおして

大町北小学校 三年 西山 和里

十一月七日の五時間目に学校で、たなべさんと、みねむらさんに、目の見えない人について教わりました。

まず、はじめに、たなべさんとみねむらさんに目の見えない人についてせつめいを受けました。そのあと目の見えない人が持つ白いつえ（はくじょう）を持たせてもらいました。はくじょうは思いのほか軽くてびっくりしたし、目の見えない人のつらさが言葉でも少しわかりました。

つぎに道路にある点字ブロックのことについて教えてくれました。丸がいくつかある点字ブロックは「あぶないよ」とまれ、「という点字ブロックだぞうです。点字ブロックはいろいろな意味をあらわしているんだなと思いました。

そして、配られたアイマスクをつけて、となりの人とじゃんけんをしました。目が見えないので「何でした。」「チョキだよ。」「グーだよ。」と言葉でつたえあいました。むずかしそうだなと思つたけど、やってみるとかんたんで楽しかったです。

今度は何かが入ったふくろが配られたので、アイマスクをつけて中に何が入っているかを当てました。アイマスクをしているときははぜつたいこの色だと思つていた物が、アイマスクを外したときにぜんぜんちがう色でびっくりしました。色が思つていた色とちがったとき、目の見えない人はたいへんだなあと思いました。

さいごにとなりの人と交代でアイマスクをつけて学校の二階を一しゅうしました。さいしょはとてもこわかつたけれどとなりの人もいるからとても心強かったです。

これからは、はくじょうをもっている人がこまっていたら助けてあげたいと思います。

親切はうれしい

大町東小学校 四年 山口 由希菜

私が三年生のとき、家族で群馬県の草津温泉に旅行に行きました。旅館の朝食は、バイキングでした。オレンジをしぼる機械があつて、私がしぼり方がわからなくて困っていると、後ろの男の人が、

「だいじょうぶ。」

と声をかけてくれて、しぼり方を教えてくれました。やってみたら出来たので、男の人に

「ありがとうございます。」

とお礼を言いました。男の人は、

「どういたしまして。」

と言ってくれました。私は、こんなにやさしい人が世の中にいるんだ、私もこの男の人みたいにやさしくなって、だれかの助けになりたいなと思いました。

また、私は、三年生のころに、歩道橋がおっついてすべって、とてもこわい思いをしたことがあり、今でも階段を下りるのがとてもこわいです。冬は、道がおっついているので、手すりを持って階段を下ります。

去年の冬、学校に来るとき、階段の手すりに雪が積もっていたので、落しながら歩いてみると、近くを歩いてきた男の人が、手すりの雪を手で落としてくれました。私が、

「ありがとうございます。」

と言うと、男の人は、

「どういたしまして。」

と言ってくれました。私は、男の人が階段の手すりの雪を落としてくれて、うれしくて、ありがとうございます。

また、去年の冬は、こんなこともありました。歩道橋に雪がいつぱい積もっているからと言って、お母さんが歩道橋の雪をかいてくれると言って、いっしょに歩いていきました。すると、男の人が、先に雪かきをしてくれました。お母さんは、

「ありがとうございます。」

と言って、いっしょに雪かきを手伝っていました。私が学校から帰ると、お母さんは、

「一人でいつも雪かきをしていたから助かったなあ。」

と、言っていました。私は、親切って大事だな、人をうれしい気持ちにさせてくれるんだなと思いました。

この三つの経験から、私は、知らない人に親切にできるって、すごいこと

だなと思いました。私も、もっと人にやさしく親切になりたいと思います。そして、人に親切にできる人がふえれば、みんながやさしくなっていくらしい世界になると思いました。

しょうがいを乗りこえるための工夫

大町南小学校

四年

手塚 心結

私は、しょうがいとは何かを授業で学びました。四人のしょうがいをもらった方に会い、知らない事がたくさんあると分かりました。

三人の足が不自由な方の名前は、「カトちゃん、ニッシーさん、ブッキーさん」です。ぎ足や車イスで生活していて大変な事やおもしろい事も、周りにいる人の協力や工夫で、しょうがいをなくす事ができると学びました。

もう一人は、耳が不自由な中村こうだいさんです。手話や口形を見て会話をしているけど、マスクをすると、会話がむずかしい事を知りました。

私は、車イスや手話を学校で学び、しょうがいをもっている人の生活がどれだけ大変かを知りました。たとえば、車イスは、乗りおりするのに誰かのサポートが必要だし、前に進むには、うでやむねの力がかなり必要です。手話は、五十音だけじゃなくたくさんの言葉や意味のある手話もある事が分かりました。そんな大変な生活をしているのに、ラグビーやスキーをがんばって練習して活やくしてとつてもすごいと思いました。他にも、バスケットボールや水泳、マラソンなどしょうがいをもった人が世界で活やくしていることも知りました。スポーツだけでなくピアノストや絵を書く人もいます。しょうがいがある人も世界へはばけるという事です。

どんなに活やくしている人も、しょうがいを乗りこえるためたくさん人の助けや工夫があるからだと思います。いろいろなしょうがいをもった人の話を聞いて私は、何ができるのかを考えました。もし私がどこかで、

しょうがいをもった人に出会った時は、何か困っていないか、助けてあげられる事はないかを考えてすごしても助けてあげられるようになりたいです。

不自由な人との関わり

大町南小学校 四年 浅野 花帆

この二年間で、しょうがいのある人と関わってきました。今回は、耳が不自由な中村晃大さんの話を聞きました。しょうがいといえば「大変そう」と思うことが多いと思います。

はじめて、耳の不自由な人と会うので手話が分かりませんでした。手話を教えてもらおうと、大変でおぼえられませんでした。中村さんは、大学で手話をおぼえたと言っていました。しょうがいがあっても、走りはばとびなどの運動ができていました。けれど、中村さんは、九十以上からの重度のなんちようで、ほとんど聞かえていません。ほちよう器をつけていますが、会話ができることではありません。耳が不自由でこまったことは、電話ができないなどと言っていました。会話の時は、口話で会話しています。中村さんは、大学でオリンピックを知ったそうです。不自由な人のオリンピックと言つとパラリンピックをこつぞつする人が多いと思います。パラリンピックと言つていました。パラリンピックとデフリンピックはちがつと、分かりました。わたしは、「同じオリンピックではないんだな」と思いました。さい後に、「しつ問で「中村さんにとつてスポーツとは」と聞きました。答えは「スポーツでいるんな交流ができた」と言っていました。

車イスでも耳が不自由でもしょうがいがあつても、こんなに元気でいられて、楽しくすごせると思いました。今まで会つたしょうがいのある人たちも、とっても元気な声でお話をしてくれました。もししょうがいになつても、四人のしょうがいの人をおもいだして元気にすごしたいです。

行動に表わす

大町北小学校 四年 竹折 心結

この前お出かけした時に、白いつえを持つている人がいました。それを見た時、目が見えないのかなと思いました。どうしてかという、学校で習つたからです。

その人はお店に入ろうとしていました。でもだれも手伝っていません。わたしは、大じようぶかなと心の中で思つていたけれど、行動では表すことができません。話しかけようとしても、ゆう気が出なかつたからです。そして家に帰つて考えました。わたしが目が見えること、歩けること、音がきこえることはあたりまえじゃないと。

今まであたりまえだと思つていたことが、できない人がたくさんいます。人とちがつ事でいじめる人もいます。でも、やさしくしてくれる人がふえることをねがいます。自分も話しかけるゆう気をもちたいです。

再編したら友だち作り

大町北小学校 四年 浅川 和樹

ほくは、大町北小から北部小にかわつたら友だち作りにはチャレンジします。北部小になったら、学年の人数はだいたい九十人くらいになります。できれば五年生の中で、五十人くらい友だちを作りたいなと思つています。

北部小になったらどういふ生活になるのか気になります。もしかしたらヤンチャな子もいるかもしれません。

みんなとしたい遊びは、ドッジボールやおぼつこなびるこぼです。ドッジボールはみんなで作ると人数が多いからもしかしたらすへアウトになるかもしれません。おぼつこはみんなできて楽しいと思つています。校舎の中は歩かないといけないけど歩きおぼつこことかできて楽しいです。

です。
北部小になったら、いっぱい友だちを作りたいです。

協力することができた音楽会

大町東小学校 五年 島田 稜生しまだ りょうせい

僕の学校は、今年で閉校してしまいます。六月には、この学校最後の音楽会が行われました。全校スローガン「東小最後の音楽会を史上最高の音楽会にしよう」を達成するために、僕たち五年生は「みんなの心に残る東小最後の音楽会にしよう」と目標を立てて、合奏『栄光の架橋』、合唱では『ひろい世界へ』を発表しました。

僕は、合奏でリコーダーを担当しました。リコーダーのパートでは、大きく二つの困難がありました。

一つ目は、サビに入る所です。この困難を解決するために、木琴・鉄琴、リコーダーのパートと協力して練習しました。ほくがサビに入る所でタイミングがわからなかった時に、同じリコーダーのパートの友達から

「サビに入る所のタイミングは木琴・鉄琴と一緒に練習した方が良い練習になるよ。」

とアドバイスをもらいました。すると、上手にサビに入れるようになりました。

二つ目は、サビでリズムが速くなる所です。ここでは、僕のリズムがどうしてもついていけなくてとても難しかったですが友達に、

「心の中で拍を数えるとリズムを取りやすくなるよ。」

「練習をする前に声を出して、ドレミをいうといいよ。」
と教えてもらいました。この困難も、同じリコーダーのパートの人だけでなく、違う楽器を担当していた友達にもアドバイスをもらうことで乗り越えました。

今年の音楽会は、僕の中で思い出になったと思います。それは、僕の演

奏がうまくいったことだけでなく、その前の練習の時から、自分が苦手な所を考えて、それを同じ楽器の人だけでなくいろいろな人に相談をすることができたからだと思います。

これからも、音楽会のような大きな行事でなくても困っている時には、すぐ友達や先生に相談したいです。また、このような相談を聞いてくれる友達をこれからも大切にしていきたいです。

キャンプファイヤーの企画

大町東小学校 五年 松田 彩葉まつだ あやな

私達は、七月にデイキャンプに行きました。私は、キャンプファイヤーの係でした。

キャンプのレクを企画するとき、ゲーム的なレクリエーションを始めは考えていました。しかし、先生から

「キャンプファイヤーの火を囲む良さは何。」と聞かれたときにゲーム的レクリエーションは教室でもできるので、キャンプファイヤーの企画は歌やダンスで考え直してみました。

ダンスを決めるとき、調べてもあまり見つかりませんでした。それでも、周りに助けを求めなかったので、どんどん決めるのがおくれてしまいました。曲が決まらずクラスの間にも迷わくをかけてしまいました。なかなか決められず困っていた私達を助けてくれたのもクラスの仲間でした。クラスのみんなが

「この曲はどう。」

とたくさん意見を提案してくれました。ダンスや歌のふり付けなどもたくさん練習して、おどれるようにしてくれました。

キャンプ前日になってしまった点火のぎしぎしの進め方で先生から「キャンプファイヤーの火には意味があるんだよ。」

と教えてもらいました。係のみんなまで話し合っって火の意味と、誰がどの意

味をもつ火の神を担当するのか決めました。本番直前までリハーサルをしていました。本番は、リハーサルでやった火の神の質問には、みんなが元気に答えてくれました。ダンスや歌などもみんなが楽しくもり上げてくれました。

みんなのおかげで楽しいキャンプファイヤーができました。友達と協力すると自分のできないところができて新しいことができたように感じるので、楽しく仕事や課題を進められます。友達や仲間がいたので、このように困ったことを楽しくできるのです。これからも困ったことを相談したり協力したりして解決したいです。

外国の人とどう付き合うか

大町西小学校 五年 今村 柊登

ほくたちは、「あけほの」で、中国人や韓国人と日本人・インドネシア人の労働者・日本の学校で勉強するブラジルからの友だち等、様々な立場の外国の人について、外国の人の気持ちを考えながら学んできました。

特に、ブラジルからの友だちは、日本人は、外国人だからといって差別していました。外国人だから別の国の言葉が通じなかったり、伝わらなかつたりするから差別する、ブラジルからの友だちが、がんばっているけれど、言葉が伝わらないことで、怒りっぽくなるのは、気持ちがよく分かります。ほくも、自分の言葉や思いが、相手に伝わらない時は、カッとなってしまつからです。

日本語教室の先生が、言葉が伝わらないというところがどういうことかワークシヨップをしたり、動画を見せてくれたりして教えてくれました。ベンガル語の五十音図を見ながら自分の名前を書いた時は、とても時間がかかりました。ペルーの学校での日本人の動画では、話を通じなかつたり、分からなかつたりして、「もしも自分が外国の人だったら」緊張して、何をすればよいか分からなくて不安になつてしまつと思いました。

日本に来た外国の人に、「自分は何ができるのか。」を考えました。みんな最初は緊張しているから、フレンドリーに接してあげたら緊張が和らいで、どっちも楽しく生活できるし、ここならやっていけると思ってもらえると思います。韓国の人も昔、日本人が植民地にした所なのに、日本人のために韓国に「ナザレ園」を作ってくれました。中国の人も戦争の時に、敵国だった日本人の孤児たちを育ててくれました。

そうは言っても、「みんながそういう人という訳ではない。鹿をけつたり、コンビニでけんかをしたりする人もいる。なのに、フレンドリーなんて言えるの？そういう人たちにフレンドリーに接してはられない。」という人もいるかもしれません。

そういう人たちは、日本の文化も知らずに、いたずらや勝手なことをするのだと思います。常識がない人ばかりではないでしょう。そういう人は、そういう人、ちがう人は、ちがう人で、対応を変えればよいと思います。外国の人に限らず、助け合いをしている人だっているから、フレンドリーに接するのは、まちがいではないと、ほくは思います。日本の文化や歴史を知ること大事だと思えます。日本に来たからには、日本のルールを守って、日本の文化を知って楽しんでもらいたいと思います。

日本語教室の先生が、お互いが「心のかべをとりぞくこと」が大事であること、そのために、「やさしい日本語」はつきり・さいごまで・みじかくで話しかけること」を教えてくださいました。これを使って、ほくも日本に来た外国の人にフレンドリーに接したいです。

傍観者

大町西小学校 五年 金原 旭

ほくが、これから傍観者のことを書くのは、道徳の授業で「傍観者はどういう人たちのこと？」という題名の授業を受けたからです。

まず授業では、傍観者とはどういう人たちのことをいうのか考えまし

た。その後で、自分の行動は、傍観者にあたるのか振り返りました。すると、けっこう自分が傍観者になっていたことに気づきました。たとえば、友だちがいじめにあっている、先生に相談することができませんでした。自分も相手にいじめられることがわかったからです。ほかにも、友だちがいじめを言われても、そのまま見過ごしてきてしまいました。

授業で学んで、いじめやいやな思いをしている友だちを見て、何も行動できなかった自分も傍観者の一人だということがわかりました。まわりで起っているいじめを見ていて、そのままにしていたら、いじめにあっている人がさらに悲しい思いをしてしまいます。その場で見ている人が、一言勇気をもって声をかけたら、いじめは止められるかもしれません。

しかし、自分にはまだそうする自信がありません。でも、授業を通して、ひとり、ふたりと声をかけていく人が増えていったら、いじめは止められるかもしれないと思いました。実際にそれができなくても、自分が一番話しやすい両親に伝えたり、次に先生に相談したりしていききたいと思います。

傍観者は、いじめやいやなことをしている人を見ても何も行動できない人です。自分が傍観者にならないために、授業で学んだことを生かして、今、自分にできることを考えて、少しでも行動に移していきたいと思えます。

思いやりは、思いついてどんな気持ちなのか分かりませんでした。思い

大町北小学校 五年 窪田 彩加

わたしは、思いついてどんな気持ちなのか分かりませんでした。思いやりは、人にやさしくすることなのか、困っている人を助けることなのか、いろいろ考えても分かりませんでした。そんなわたしが、思いやりを強く感じた出来事があります。

わたしは、バドミントンクラブに入っています。この前、ダブルスの大

会がありました。ダブルスの大会でペアを組むのは、小さいころから仲良しの友達でもあり、そしてライバルでもあるヒナさんです。試合が始まる前からドキドキしていました。試合が始まると、かたがたくなってしまいました。前におちるシャトルに気づくのがあぐねたり、強く打とうとして空ぶったり、ミスが続きました。「わたしのせいじゃありません。」とだんだん弱気になっていきました。その時、ヒナさんはやさしく「大丈夫だよ。まだ終わってないよ。次、一本とろう。」とあかるく声をかけてくれました。おこっているどころか、いつものように声かけをしてくれました。わたしの気持ちはふっとあたたかくなりました。それから、ヒナさんは「次、落ち着いて打てば大丈夫。」と声をかけてくれました。わたしも、少しずつ動きが良くなって、ミスも減っていきました。二人でラリーが続いて、得点が入った時は、本当にうれしくて、思わず笑顔になりました。だげ最後のセット、相手のスマッシュが決まり、わたしたちは、負けてしまいました。負けたしゅん間、心がぎゅっといたくなって、「もっと上手だったら勝てたのに。」とみだが出そうになりました。そんな時、ヒナさんが「いい試合だったね。最後のラリー、すごくよかったです。」と明るく声をかけてくれました。わたしのミスを何も責めず、がんばったところを見てくれたのです。その言葉に、わたしは負けたくやしきよりも、ヒナさんの思いやりの方が心に残りました。

この試合でわたしは、思いやりの本当の意味に気がつきました。思いやりとは、困った時に助けてくれることだけではなく、くやしき気持ちや不安な気持ちを分かってくれられることだと思います。ミスが続いて不安だったわたしの気持ちに気づきやさしく支えてくれました。だからあきらめずに最後までプレーできたのだと思います。

これからは、わたしも友達に気づいて行動できる人になりたいです。試合でも、学校でも、だれかが落ちこんでいたら、そっとはげませような、そんな思いやりのある人になりたいです。

みんな仲良くするために？

大町東小学校 六年 麻田 希愛

みなさんは、友だちに言われたり、されたりしたことって、「いやだな」「やめてほしいな」と思ったことや、「悲しいな」と思ったことはありませんか？
また、自分がとった行動で、「こうすればよかったな」「自分がやられたらやだったな」と思ったことはありませんか？私はそう思うことがよくあります。私は、クラスのみならずともっと仲良くできないかなと思っています。そのために私は、三つの方法を考えました。

一つ目は、自分がやられていやなことは、相手にも絶対にやらせない、言わないようにすることです。自分がやられていやなことをすれば、その友だちとは仲が悪くなるし、空気がぐっぐっしてしまいます。周りで見ている人も、険悪な雰囲気になるってしまいます。友だちもいなくなってしまうかもしれません。ですが、いやなことをしなければ、相手から信頼されるし、「優しいな」と思ってもらえて、友だちもふえると思います。みんなと仲良くするための一歩だと思います。

二つ目は、友だちとのトラブルがあったときにどうしてこうなってしまったかを考える時間を作ることです。これは、先生が教えてくれて、なるほどと勉強になったことです。トラブルがあったとき、反省してるといっても、自分のどんな行動を反省したのかを考えないと、これからの自分の行動に生かすことができません。自分のいけなかったところを、考えてから謝ると、友だちに対してごめんなさいという気もちがもてて、謝ったときに相手も、許してくれると思います。自分がしたことをしっかりとふり返って、これからの、友だちのかかわり方に生かしていくことが大事だと思います。

三つ目は、差別をしないようにすることです。私は、差別には二つの種類があると思います。一つは、その人たちを特別扱いをすることです。人によって態度を変えていると、他の人からみるといやな気もちになりクラスの雰囲気が悪くなってしまいます。もう一つは、その人たちにいやな気もちをさせてしまうことです。例えばそつすると、その友だちが避

けられてしまうと、周りで見ている人たちも、近寄ってこなくなり、どんどんと、いじめにつながっていくと思います。なので、差別は、絶対にやめたいです。クラスで、友だちがいなくなったり、雰囲気が悪くなったりしないように、自分も気をつけたいと思います。

私は、この三つの方法が仲良くするために大切だと思います。この三つ以外の方法も探しながら、クラスや学校のみならずと仲良く楽しく生活していきたいです。

あいさつをしよ

大町東小学校 六年 須澤 一鶴

皆さんは、学校にいる時や登下校中など、誰にでも気持ちよく明るい声であいさつができていますか。私は、六年生になってから、そのことを意識してあいさつをするようになりました。

六年生になって、「最高学年が、あいさつができなかったらよくないな。」と思って、他の学年の人や、先生達に、自分からあいさつをすることを意識するようになりました。

私は、話したことがあまりない人もあいさつを沢山したらいいと思います。理由は、同じ人や仲よしの人とばかりあいさつをしても、あいさつは広まらないけれど、話したことが少ない人でもあいさつをすれば、その人と仲よくなれるかもしれないし、なにより、沢山のひとあいさつをして自分も相手も気持ちよくなると思ったからです。

東小では今年、本部仲よし委員会の企画で、「あいさつシール千枚チャレンジ」を行いました。一日に十五人以上にあいさつをしたら、本部仲よし委員から、シールが一枚もらえます。そのシールが全校で千枚集まると、楽しい遊びをするという企画でした。私は、この企画をしたら、沢山の人があいさつをかわしているし、自分からあいさつをしている人も沢山いたので、皆があいさつをしていてもよい活動だと思いました。

自分が意識をしていないと、気持ちのよい明るいあいさつは、なかなかできません。なので普段からあいさつを色々な人とすることで、少しずつ相手に伝わるような声で、あいさつをすることができるようになってきました。

私は登下校中に、地域の方や犬の散歩をしている方たちとすれちがいます。すれちがうと、私の顔を見ながらニッコリ笑顔で、

「おはよう、いってらっしゃい。」

「おかえり。」

と、声をかけてくれます。そんな所が、大町市のいいところだなと思っています。なので、私も声をかけてもらったら、元気に、

「おはようございます。」

「ただいま。」

と返したいし、自分からもあいさつをして、私の思う大町のいいところを広げていきたいです。

あいさつをすると、自分も気持ちよくすごせるし、周りの友達たちももっと仲よくなれると思います。なので、これからも沢山のひととあいさつをして、残りの小学校生活を元気に楽しく過ごしたいです。

自分が自分らしくいるために

大町南小学校 六年 服部 陽菜乃

私は、自分に自信がなく、相手と比べやすいので、自分らしくいられることを五つ考えてみました。

一つ目は、自分の行動に自信を持つことが大切だと思いました。なぜなら、自分の行動に自信があれば、誰かに悪口を言われたり、SNSで誹謗中傷されたりしても、大丈夫と思えるようになるからです。

二つ目は、自分の好きなことなどの自己理解が大切だと思いました。な

ぜなら、自分の好きなことを見つけると、自分の特徴が分かり、自分らしくいられると思うからです。また、好きなことをすると「楽しい」という気持ちになり、自分自身に自信を持つことにつながります。

三つ目は、相手と比べないことです。私は相手と比べてしまうことが多く、その度に、どんどん自信をなくしてしまっていることがあります。そのようなことをなくすためには、好きなことや苦手なこともふくめて、自分の良いところを見つけることが大切だと思います。そうすると、自分に自信を持ち、相手と比べることをしなくなると思います。

四つ目は、目標を立てることが大切だと思います。目標を立てると、それができた時の達成感を感じることができ、自分への自信につながります。それから、自分の目標に向かって、相手と比べることも少なくなると思います。

五つ目は、人に褒められた時、否定するのではなく、「ありがとう。」と伝えることが大切だと思います。私は友だちに「すごいね!」と言われた時に、「いや、全然だよ。」と、すぐに否定してしまいます。でも、そうしてしまうと自己肯定感が下がってしまい、褒めてくれた相手を否定してしまうことになってしまいます。否定された相手は、嫌な気持ちになってしまいかもしれません。だから、褒められた時は、「ありがとう。」と、素直に受け止められるようになります。そして、私も友だちに「ありがとう。」と言えようと思います。友だちの良いところをたくさん見つけたいです。これからは、自分らしくいるために、五つのことを意識してみたいと思います。自分に自信が付き、自己肯定感が上がると、相手の気持ちも良くなると思います。まずは、自信を持つこと。そして自信を持ち、自分らしく生きて楽しい人生にしたいと思います。

いじめをなくすために必要なこと

大町南小学校 六年 太田 陽梨

みなさんは、いじめについてどのように考えていますか。六年生になって、私たちのクラスでは、いじめについてのアンケートをしました。そして、私のクラスでは、残念ながらいじめが存在していました。私は、「いじめなんてないだろう」と、軽く考えていましたが、自分の知らないところで誰かが傷ついているということを知りました。

そして、そのことがきっかけとなり、残り少ない小学校生活の日々を、自分もみんなも楽しく過ごすにはどうしたらよいか、そもそも、どうしていじめが起きてしまうのか疑問に持つようになりました。

そこで、私はインターネットで調べてみました。その結果、いじめが起こるきっかけの95%が「いじり」から始まるということが分かりました。そして、いじめを起こさないためには、次の二つのことが大事だと思います。

一つ目は、クラスで「いじり」をしている友だちがいたら、すぐに先生や大人に相談をするということです。

二つ目は、「いじり」といじられるのは、いじめにつながるから「やめよう」という雰囲気をつクラスでつくることです。

この二つのことが、いじめをなくす第一歩だと思います。

いじる人にとって、それがちよつとしたことでも、いじられている人が嫌だと感じれば、それは「いじめ」になるからです。だから、いじられていることを嫌だと思っていなくても、周りの人が気がついて「大丈夫?」「と、声をかけてあげることが大事だと思います。私も、実際にいじられていた友だちに、「どう思っているのか心配で、「大丈夫?」と声をかけたことがあります。その子は「大丈夫だよ。」と答えてくれて少し安心しました。人それぞれで受け取り方が違うので、周りをよく見て気にかけてあげることがこれからの生活で大切だと思います。

残り少ない小学校生活や、これから始まる中学校生活の中で、いじめにつながるような場面を目にするかもしれません。その時は、周りの反応や

態度を気にせず、勇気を出して声をかけてあげられるようになりたいです。それが、いじめをなくすために必要なことだと思います。

友達といじめ

大町北小学校 六年 田中 志青

ほくには、友達がたくさんいます。友達と一緒にいるのはすごく楽しいです。どうして楽しいのか考えてみたら、二つのことが思い浮かびました。

一つ目は「遊ぶこと」です。友達とは、まずは遊んで関わることから始まると思っています。ほくは今までは、あまり知らない人も、遊んでから友達になったり、遊んで仲を深めたりすることがありました。小学校に入学したとき、最初は今まで仲の良かった特定の人と遊んでいたけど、今はたくさんの人と遊んでいます。遊びながら話していると、話が合って、どんどん友達が増えて遊ぶようになっていったからだと思います。そして、いろんな人と遊ぶと、もっと楽しいということが分かりました。

二つ目は、友だちとの協力のし合いです。この前、算数で分からないことがあった時に友達に教えてもらって、それで分かったことをまた違う人に教えました。これが協力のし合いだと思います。これからも、そして中学に行っても協力し合っていきたいと思いました。

友達とはいっしょにいるだけですごく楽しいです。でもただ楽しいだけではなく、協力し合ったり助け合ったりすることが大切だと思います。これからも、そして中学生になっても、友達と協力し合ったり助け合ったり話し合ったりして過ごしていきたいです。

いれまでのぼくといれからのぼく

大町北小学校 六年 降旗 遙生ふりはた ぼるき

ぼくはこれまでの六年間を振り返ると、成長したなと自分で思うことがあります。

それは、友達と自分との関係です。一年生の時や転校生が来た時など、うまく話せるかなとか、友達になれるかななどと、心配をしようまく話せないときがありました。でも六年生になって、積極的に話せるようになり、言いたいこともちゃんと言葉に出せるようになりました。

なぜ変わったのか、自分で考えてみました。すると、「一つ思いつきました。それは、水泳です。ぼくは四年生からスイミングスクールの選手」になり、練習や大会でいろいろな学校の人たちと出会いました。その時にどうやって仲良くなれるかを考えて、いろいろな話しかけるようになりました。それでそのうちに仲良くなって、「コミュニケーション力が身についたんだと思います。

これから、もっと多くの人と出会うと思います。中学校に行ったら、初めて出会う人もたくさんいますが、そういう人ともたくさんコミュニケーションをとって、いろいろな人と友達になりたいです。

「男らしさ」「女らしさ」にとらわれないために

八坂小中学校 六年 前波 陽向まえなみ ひなた

テレビを見ていると、差別についてのCMが流れてきた。その内容は、授業の場面の絵で、「将来の夢はパイロットです。」「飲食店の場面で「支払いカードで。」「おもちゃ屋さんの場面で「ソックスがいい。」「公園の場面で「サッカーしようよ。」「家の場面で「子供が熱を出したので有休を取らせてください。」「など、声のないふきだしが次々に流れてきた。なんだろうと見ていたら、最後に「聞こえてきたのは、男性の声ですか、女性の声です

か?」「無意識に差別することをやめよう。」「という言葉が表示された。自分もCMを見ていたときに、「これは男性が言っている。」「これは女性が言っている。」「と、思いこんでいたことに気づき、無意識に差別をしていたことについて反省した。

それをきっかけにジェンダーについて調べてみた。最初にジェンダーとは社会的意味合いから見た男女の性区別ということが分かった。そして今問題になっているのが「男らしさ」「女らしさ」です。例えば、「男の子は青」「女の子はピンク」という色の強制や「男の子だから泣いちゃダメ」「女の子なのだから家事をやりなさい」というらしさの強制や「男性は働く」「女性は家庭のこと」という役割分担などの強制がある。

私はこの問題について「男らしさ」「女らしさ」を求めなくてもいいと思う。なぜかという、私は青や緑が好きだし、「男の子は泣くな」という文があるけど男の子だって悲しかったら泣いてもいいと思うし、なぜ泣いては駄目なのか私にはわからなかった。

その他にジェンダーについて自分でも体験したことがある。私は紺色のランドセルを使っているが、一年生のとき、

「えー女の子なのに紺なの?」

と言われたことがある。その時に自分は傷つきはしなかったが、他の人がそれを言われたら傷つくかもしれないと思った。「女子は赤」「男子は黒」という色分けは、昔のランドセルの慣習が残っているのだと思う。今の時代は女子が青のランドセルを背負っても男子がピンクのランドセルを背負っても何も言われることはないと思うし、言われる筋合いもないと思う。

これらの経験を通して、私は無意識に差別することをやめるといふことや、「男らしさ」「女らしさ」を常日ごろ求める人がいたら自分でもそれは違うと思います。」「とりたい、そのジェンダーでいじめが起ってしまったら、今回調べた話や、自分の体験談を話して、ジェンダーが理由でいじめをしてしまった人に理解してもらい、少しずつでも、みんなが自分らしく生きていける社会になることを願っている。

インターネット上の誹謗中傷

八坂小中学校 六年 北澤 周きたはらわ しゅう

今、僕たちにとってインターネットを使うことは、当たり前になっていきます。友達とメッセージを送ったり、動画を見たり、ゲームをしたり、インターネットは生活で大きな役割をしています。

その反面、インターネットの世界には誹謗中傷という大きな問題があります。これは、人を悪く言ったり、心が傷つくことを書いたりすることで。僕は動画サイトを見てみると、投稿者や動画に対してひどい言葉が書かれているのを見ることがあります。見た人がイヤな気持ちになるようなコメントがありました。そのとき僕は、「こんなことを書くのは動画の投稿者にも、動画を見ている人にもすごく失礼だ」と思いました。では、どうしてこんなコメントを書いてしまう人がいるのでしょうか。

僕が考える理由としては、インターネットでは顔が見えないからだと思います。直接会っているわけではないので、相手の顔がわかりません。だから「バレないだろう」という軽い気持ちで、ひどい言葉を書いてしまうのかもしれない。しかし、インターネットでの悪口も警察が調べれば誰が書いたか分かります。

僕は以前、ある動画のコメント欄を見ていたときに、投稿者やコメントを書いている人などを傷つけるような言葉が書かれているのを見ました。そのコメントを見たとき、僕はとても悲しい気持ちになりました。「どうしてこんなことを書くのだろう?」「書かれた人はどんな気持ちになるのだろう?」と考えました。きっと投稿者やコメントを書いて人も心が痛くなるし、そのコメントを読んだ他の人達も楽しい気持ちがなくなってしまう。誹謗中傷を書いた人は、ストレスを発散しているだけで、その人以外は誰も得しません。むしろ、多くの人を悲しませたり、嫌な気持ちにさせたりします。だから、僕は誹謗中傷は絶対にしてはいけないと思っています。では、どうすれば誹謗中傷を減らすことができるのでしょうか。僕は、コメントを書くまえに「相手が読んだらどう感じるかな?」「自分が同じことを言われたらどう思うかな?」と考えることが大切だと思います。

相手の気持ちを考えて、言葉を選ぶだけでも、インターネットは気持ちよく使えるようになるはずです。

僕はこれからも、インターネットでコメントをするときに、相手が少しでも楽しい気持ちになれるような言葉を書きたいと思っています。そして、みんなも同じ気持ちでコメントを書けば、誹謗中傷は少し減らせると思います。インターネットを気持ちよく使うために、相手を思いやることが大切だと思います。

いじめがなくなるには

八坂小中学校 六年 仁科 輝也にしか てるや

最近、テレビなどで「いじめ」という言葉をよく耳にしました。実際にいじめの件数を調べてみると、年々増加していることがわかります。いじめは暴力だけでなく、言葉による悪口や仲間外れにすることなども含まれます。さらに、近年ではインターネットやSNSを使ったネットいじめが増えています。

実際にいじめられている人の気持ちは簡単に理解できるものではありません。しかし、その人の立場になって考えてみると、とても辛い思いをしていることがわかります。だからこそ、いじめはなくなしてほしいと思います。では、なぜいじめはなくならないのでしょうか。

その大きな理由の一つは「まわりの人が見て見ぬふりをしていること」だと思います。この「見て見ぬふり」についてはいくつかの調査が行われています。たとえば、厚生労働省の調査では、「クラスの誰かがいじめをしているのを見たときにどうするか」という質問に対し、小学生から高校生までの回答の変化を調べました。その結果、「別に何もしない」と答えた人の割合が、学年が上がるほど増えていることがわかりました。つまり、日本では年齢を重ねるにつれて、「見て見ぬふりをする」人が増えているのです。

中学生の部

誰のため

大町中学校 二年 中島 愛梨

これからぼくたちができることは、まわりの人がいじめに気づいて、正しい行動をすることだとぼくは思います。いじめられている人は、そのとき言い返せなかったり、がまんしてしまったりすることがあります。でも、本当は心の中でも傷ついていて、「いつかこんなことされるんだろ」「とっついな気持ちでいっぱいになっているはずですよ。もし自分が同じ立場だったらと考えると、その苦しさがよく分ります。

だから、いじめを見てしまったときに、何も言わずにただ見ておくだけではないと思います。「自分には関係ない」と思ってしまうこともあるけど、だれかが行動しなければ、いじめは、なくなれないと思います。勇気を出して「やめたほうがいいよ」と言ったり、先生や大人に伝えたりすることは、とても大切な行動です。自分が直接言われなくても、信頼できる人に相談するだけで、その人を助ける事ができるかもしれません。

いじめは、ひとりで抱え込んでしまうと大きな問題になります。でも、まわりの人が気づいて動けば、少しずつ良い方向に変えていけるとぼくは思います。みんなが安心して生活できるように、これからも相手の気持ちを考え、正しい行動をしようとする気持ちを大切にしていきたいです。

中学生になってからすべのこと。私はとても窮屈に感じていた。それはなぜか。「周りに合わせる」を覚えてしまったからだだった。

小学生の頃はクラスが一つだったため、それほど気を遣わずに学校生活を過ごせたのだが、中学生になり、クラスには知らない人のほうが多く、周りに何とかついていこうと自分の個性を抑えていた。つまり「周りに合わせる」を覚えてしまったのだ。

こうなることは、はじめから知っていたつもりだった。周りに合わせることは人のコミュニケーションのためにも大切なこと。でも、周りに合わせることはこんなにも苦しく、居心地が悪いとは全く知らなかった。

昔、友達と遊びに出かけた時にこう言われた。「大人数で遊びに行く事が苦手。必ず誰かに気を遣って合わせるようになって疲れるだけだから。」こんな気分だったのか。その時の私は、友達の気持ちを、何にもわかってあげられていなかったことを後悔した。それでも、周りに合わせる私に「少しは成長したね。」と、言ってくれる人もいた。これが普通なのか。そう思った。まるで自分がどこかに行ってしまったような感覚だった。

しかし、そこで奇跡が起きた。個性豊かな同級生が私にたくさん話しかけてくれるようになった。友達になってくれた。私の個性を取り戻してくれた。その同級生にとっては普通のことだったのかもしれないが、周りに合わせて疲れていた私にとっては救いだだった。学校が少し楽に感じるようになっていった。私はこの友達に助けられた経験は必ず何かに活かそう。そう思うようになっていた。

学校生活で疲れていたのは私だけではなかった。私の友達もまたその一人だった。ある日の帰り道、私は友達に相談された。「学校が辛い」という

内容だった。その友達は教室に入った時に居心地が悪くなるようで、それは中学に上がりたての時の私と似ていると勝手に思ってしまった。

何とかして救いたい。私は慌てた。どうすればいいのかわからなかった。友達のごとで頭がいっぱいになった。一緒に学校に行ったり遊んだりする仲だからこれからも一緒に学校に行きたい。その一心で、すべにでも行動しなければと思った。

でも私には友達の担任の先生にすぐ伝えて様子を見てもらうことしかできなかつた。私が初めのころ周りに合わせていた出来事も活かすことはできなかつた。一緒に学校に行きたいという自分勝手な私の意志のためだけにしか動けなかつたのだ。この時の私には何もできなかった。

もっとよく考えていたら、友達を救ういい方法があつたのではないか。担任の先生に話したことは、ただの迷惑にしかならなかつたのではないか。周りに合わせてばかりの頃の私を救ってくれた同級生のように、自然な立ち回りができていたら状況は変わっていたのではないか。私は、また空気を読めなかつたかもしれない、とても後悔した。

しかし、後でその友達が言ってくれたのは「ありがとう」だった。どうして感謝してくれるのと私は疑問に思った。たとえ友達をこれで救えていたとしてもこんな投げやりな先生を頼る救い方は乱暴だつたのではないか。

この事でひとつだけ確信したことがある。それは、声を心で聞かず、落着いて「聴くこと」の大切さだ。声をやっと思つてくれたのに友達の声を雑に扱わず、声を「聞く」ではなく、「聴く」こと。これがもっと大切にできていたらもっと違う救い方になつていたはずだ。このことは絶対に忘れない。

私はこの人権作文を書くことと決めた時、もっと違うことを書くこともできた。でも私はこのことを書くことに決めていた。周りに合わせて疲れている人のために。誰かに声を聴かせてもらえた人のために。声が届かない人のために。私は誰かのためになることができるよう、経験を忘れずに、人の声を聴いていこうと思ひ。

共生を大切に

大町中学校 三年 平林 明依

皆さん想像してみてください。あなたがもし、外国に行くことになったらしたら、笑顔で親切に接してくれる国と、自分に冷たく接する国、どちらに行きたいと思えますか。

日本に関わらず、世界中で大きな課題となっている人種差別。なぜこのようなことが起こってしまうのでしょうか。この要因として考えられるのが、肌の色、目の色、言語が異なるからという固定概念の押し付けです。また、いじめも人種差別と同じです。自分が差別、いじめをしていないと思つても、相手から見れば差別、いじめだというようにとらえられてしまうのです。世界、日本には、様々な人種が存在するため、自分と違うのは当たり前です。しかし、そんな中でも、世界中での人種差別についてのニュースは絶えません。

現在でも根強く残っているのは、黒人差別で、そこで、最も悲惨な事件として取り上げられたのは、「ジョージ・フロイドの死」です。二〇二〇年五月二十五日、アメリカで、警察官のデレク・ショーヴィンを被疑者とする、他三名の関与によつて、偽ドル札の使用容疑により手錠をかけられたフロイドは、約九分もの間、頸部を膝で警官に押さえつけられ、「呼吸ができない。助けてくれ」と懇願したにもかかわらず死亡しました。この事件以降、全米でBLM運動と暴動が多数発生しました。この事件を目の当たりにして、かわいそうといつ気持ちよりも、警察官でも差別してしまつんだ、悪いことをしたことは事実であっても、人の命を奪つことにはならないのではないかと、そして、人種差別は最悪の場合、戦争や紛争など最大の「人権侵害」を招いてしまうということも忘れてはいけないと思ひました。その上、植民地時代からの歴史に伴つて、関係のない人まで差別されてしまうということも実感しました。もう二度と同じことが起こらない世界になつてほしいです。

他の事例として、オーストラリアではかつて白豪主義政策をとつていま

したが、第二次世界大戦後の大量移民によって多文化社会が開かれました。その後、人的資本を重視したことを切り口に、「国家多文化主義アジェンダ」を掲げました。これを掲げたことによって、各国の文化を支援することや、日常面では、スーパーマーケットや学校での宗教上、教育面での配慮など多文化を浸透させ、人種的な差別をなくす取り組みが行われています。しかし、多文化主義が移民の多様性を称える一方、先住民の土地権や社会格差は長年放置されている状況にあります。日本も同様です。アイヌの人々は、明治時代の同化政策によって、生活の基盤を踏みじられ、今もなお差別が続いています。このような、見えにくい課題に対して、まずは、私たちがこの現状を「知る」ということが大切なのではないでしょうか。

私は、将来外国へ行ってみたい、英語を学んでみたいという思いから、英会話に通っています。私に通っている英会話では、カナダ人の先生が、学校ではA-LTの先生が授業を教えてくれる仕組みになっていますが、一度も私が嫌な思いになったり、させたりしたことはありません。なぜなら、私たちは、同じ境遇に立ち、お互いを理解しているからです。修学旅行で奈良と京都に行ったとき、英語の先生から外国の方と話してみようという課題が出ました。十一年間英会話に通っていますが、今でも母国語ではない言語を話すことは難しいと感じます。それでも勇気を出して二人の外国の方と話しました。どちらの方も親切で、一人の方はアメリカの国籍の方でしたが、自分がかかる範囲の日本語で話してくれました。私も、相手も流暢ではなかったけれど、相互理解を図る良い機会となりました。

以上のことから、私の例も先ほど挙げた事例も関連して、お互いの境遇を理解し、共生を図ることが、人種差別をなくし、お互いの人権を守るための大切なことであると思います。これからも、人種差別がなくなるよう、私たち、一人一人が人権に対する意識を高め、共生できる社会を築いていきたいです。

「自分らしさ」って？

八坂小中学校 八年 仁科 あいる

「あなたにはもっと暗い色が似合う」

母に言われた時、少しフラットとした。確かに普段は黒や灰色の暗めの服を着ているけれど、たまには明るい色の服だっと思って着たい。でも、その時なんとなく買ったのをやめてしまいました。母は私のことを思って言ったと思います。けれど、私の「うちののが好き」「この服が着たい」という気持ち、あっているのではないのでしょうか。皆さんは「自分らしさ」を隠したことはありませんか。私は人にとっての自分をあまり言えなくて、苦しいのに平気なふりして頑張ってしまうことがあります。皆さんも自分の意見などを言えない経験があると思います。それで、なぜ自分らしさを隠したり我慢してしまったりするのか考えてみました。私は色々な理由があると思います。周囲の空気に合わせたり、自分の弱み、コンプレックスに対して「こんなのがあっちゃだめだ」と強く思っていたり、他人からの評価を気にしすぎて色々我慢してしまったりするのだと思います。こういうことで、自己肯定感が下がったり、ストレスが溜まったりするのではないかと思います。だから私は、少しずつでも「自分の気持ちを大切にしたい」と思うようになりました。本当のことを言うのは簡単なことじゃないからこそ、勇気を出して発言したいです。また、私も周りの人の「自分らしさ」を受け入れて、その「自分らしさ」を尊重できるような人になりたいです。

このような考え方をしてみても、「自分らしさ」を尊重しあうことは、人権を守ることに繋がるのがわかりました。また、自分らしさを失うのは、自身を失うことだとも思います。そして、誰かに合わせて自分を隠すのではなく、自分の気持ちをちゃんと持って生きていき、そういう「自分らしさ」を隠している人がいたら相談に乗ってあげたいです。ひとはみんな違う。その「違い」を大切にできるような社会になってほしいです。

「フェイクと自由」

八坂小中学校 九年 高橋 宏壮たかほし ひろあき

参議院選挙が七月に行われました。今回の参議院選挙で注目されたのは、フェイク動画によるデマの拡散です。SNSでは、「投票箱がすり替えられている」などのデマの投稿がされて拡散されました。政党でもSNSや動画を使った選挙活動が盛んになっていました。今の日本にはフェイク動画を禁止する法律がなく、取締をなかなか行えていません。また、フェイク動画を検出する技術もまだ発達途中なので、私達が見抜かなければならないのです。

六月に行われた韓国大統領選挙でも、有力候補者が刑務所に入っているフェイク動画が拡散されました。フェイク動画によって選挙結果が変わってしまうことは、あってはならないことだと思います。兵庫県知事選挙でも、SNSを多く活用した候補者が勝利したように、フェイク動画ではなくても、SNSなどの効果は大きいのだなと感じます。このように、身近なSNSですが、危険が多く誰かを傷つけてしまうことがあります。また、現代では生成AIが発達して今までよりも情報の真偽がわかりにくくなってきているので、さらに気をつけなければなりません。今年の一月、旧フェイスブック社がフェイク動画の検出をやめました。その理由にはいくつかあるのですが、その中の一つが、情報の検閲に近いので言論の自由、表現の自由を侵害しているからだそうです。しかし、フェイク動画を流した人の表現の自由などが侵害されたとしても、その動画で嘘が広まり、傷つく人もいると思うので検出しなはいけなと思います。また、嘘を流す時点で悪いことなのでそれを止めないのもいけなと思います。表現の自由も人権の一つですが、それを使って人を傷つけるのは人権侵害であると思います。小さい頃から悪口は言わないように教わってきましたが、悪口も一種の表現の自由といえるのかもかもしれません。しかし、表現の自由だといって悪口を言う人はいないと思います。それは、相手が傷つくからです。フェイク動画も同じです。表現の自由といって相手を傷つけてはい

けません。もう一度、表現の自由、言論の自由について一人ひとりが考えていかないといけないと思います。

誰かを幸せにしたら自分に返ってくる

美麻小中学校 七年 上田 乃愛うへだ のあ

皆さんは、「人権」とは何か知っていますか？「人権」とは、人が人として自由に行動できる権利のことです。この権利は、生まれつき誰もが持っている権利です。私は、「人権」を学ぶ前までは、知らない人のために何かをしてあげようなんて、あまり思いませんでした。しかし、学校で人権について話を聞き、実際に目が見えない人の体験を試みたら、私の考えは変わったのです。

人権学習の中で一番印象に残ったことは、校長先生が見せてくださったタイの動画です。その動画はこんな内容でした。ある貧しい家の子どもがお母さんのために薬を盗んでしまい、怒られて捕まっているところを近くのお店の人が代わりにお金を払い、野菜スープなどもあげて助けるという場面から始まります。その三十年後、子どもを助けたお店の男の人が、病気がかかってしまい、高額な手術代に困っているとき、ある領収書が出てきました。その領収書には「この手術代は三十年前にお支払済みです。」と書かれてありました。三十年前に子どもを助けたお店の男の人はそのおかげで手術ができ、元気になりました。

この動画を見て、私はとても素敵な話だなと思いました。三十年後なんてあまり考えられないけれども、知らない人に助けてもらって、知らない人を助けて、見えないところで恩返しをしているのだと、私は思いました。その時、校長先生は「情は人の為ならず」ということわざ、つまり「誰かを幸せにしたら自分にそのお礼が返ってくる」ということも話してくださいました。それで、お金がない人でも幸せになることはできると、動画を見て知りました。

その動画のことを家に帰って母に話しました。すると、母が「一度もあつたこともない知らない人が、めったにわからない病気にかかって、手術をアメリカでしないといけないのだけれど、それにはたくさんのお金が必要だから、寄付をしたよ。」と言ったので、私は、身近にも助けてあげられる事があるんだと知りました。

このように、私は校長先生が見せてくださったタイの動画や母の話に出会って、お金がない人でも幸せになることができることや知らない人のために何かできることがあるのではないかと考えるようになりました。これからは自分も「ありがとう」という言葉だけではなく、何か行動することで、周りの人たちに感謝を伝えたいと思いました。

想像でしかなかったことが

美麻小中学校 七年 佐藤 朝陽

皆さんは障がいのある方の体験をしたことはありませんか？ 僕は今回の福祉体験教室で、目の不自由な方の体験をしました。その時に、これまでは想像でしかなかったことを実際に体験してみて、考えが180度変わりました。その人達の日常などを体験して、感じたこと、思ったことを書いていきます。

僕は学校で、福祉体験として、アイマスク体験を行いました。アイマスク体験では、アイマスクを着けてパートナーに補助されながら校内を歩きました。その時、目をつむった時とはまた別の感覚で、目を開けても、目を閉じても、同じ景色が広がっていて、本当に何も見えませんでした。僕は最初、「目をつむった感覚と同じなんだろっな」と思っていました。全く違いました。ただ目をつむって歩くだけなら、怖くなったら目を開ければ済むけれど、アイマスク体験では、目を開けても真っ暗なのです。補助の人がいても怖くて、もし目の前に何かがあったらとか、余計な想像をしてしまつて、すごく怖かったです。目の不自由な方は、これがずっと続

いていると考えると、毎日その恐怖と戦って、打ち勝っているということですよ。いいなあと思いました。

僕は五ヶ月くらい前に手を骨折しました。その時、肘の上のあたりまでギプスで固定されて、肘と手首は完全に動かせなくなりました。日常的にやっていた好きなことなどができなくなって、結構辛かったです。特に、一番きつかったのが、お風呂の時です。片手で洗わないといけないし、ギプスは濡れると変形したり、強度が落ちてしまつたりするので、ギプスの部分には、カバーとかをつけて入らなければならず、大変でした。手が不自由な方は、これ以上に大変なんだなと思いました。

このように、僕は、今年いろいろな体験をしました。最初はあまり深く考えていなかったけれど、今年色々な体験をして、自分の考えがすごく変わりました。アイマスクの体験や骨折などの経験から、これからは体の不自由な方々に出会ったら、優しく声をかけて、寄り添っていきたいです。

高校生の部

大町岳陽高校では全校人権教育の一環で映画「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」を鑑賞しました。

人権について学ぶための題材として第二次大戦中の特攻兵を描いた映画を選定したものです。

鑑賞後に1・2学年が書いた感想文の中から5点を選びました。

人権教育を受けて

大町岳陽高校 一年 中沢 千咲

現代を生きる私達にとって、戦争について考える機会は少なく、身近に感じるものではありません。しかし私はとある出来事をきっかけに、戦争に対する関心をより強く抱くようになりました。それは、今年の四月から放送されていた、連続テレビ小説「あなばん」です。

私はもともと幼い頃から、両親から戦争についての話を聞く機会がありました。なぜなら、母方の祖父が十七歳のときに、海軍として戦争に参加していたからです。祖父は耳に相手が狙った鉄砲の弾がかすりしましたが、生きて帰ることが出来ました。祖父は私が生まれる前に亡くなってしまったため、当時の話を直接聞くことは出来ませんでした。その話を聞いた当時の私は「生きて帰ることが出来て良かった」というのが、率直な感想でした。しかしその考えは、「あなばん」や、今回上映された「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら」を観て、大いに考えさせられることになりました。

それは、戦時が「死ぬことを歓迎している」と、「時代は異なっても、

誰しも大切な人がいる」という二点です。この点について、私は考えさせられることとなりました。

戦争に行くというのは、現代の私達にとっては「死に行く」ようなものです。しかし当時の人々は「大切な人のことを守れる」「天皇をお守り出来る」このように作中で言っていました。しかし私は、あくまで表面上のものにすぎず、死ぬことへの恐怖からの発言ではないかと感じました。誰も現代と同じように、大切な人がいました。だからこそ、戦争に行くことを告げたら、悲しんでしまうから、このようにポジティブに捉え、言葉に発していたのだと思います。私達一年生は今、十六歳です。十六歳だと、戦争に参加させられる年齢なので、もしどこかで時代がずれ、私達が戦時を経験することになっていたら、身の回りの人々が亡くなっていたのだと思います。作中でも何度も、サイレンが鳴り、人々が逃げまどう姿がありました。毎日のようにどこかで人々が亡くなり、自分の命が明日もつか分からぬ状況の中で生活する事は、私にとっても精神的に厳しいものだと思います。しかし当時の人々は自分が主軸ではなく、自分の大切な人や、後世の人々のことを考え、自分の命を犠牲にしてまで突撃していきました。私はあの姿に感涙したとともに、感銘を受けました。

戦争八十年を迎えた今、存命の方は段々少なくなってきたのが現状です。だからこそ、こういつた戦争の作品にふれ、考えを深めることは、日本に産まれた私達たちの義務だと思っています。戦争をして亡くなった方、生きてくださった方の双方がいたから私がいることを忘れてはいけません。思いました。だからこそ、今をしっかりと生き、戦争で悲しい思いをした方々がぶい思いをしない現代にし、後世にも伝えていきたいです。

「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら」

大町岳陽高校 一年 谷川 結愛

今回、人権平和の学習で観たこの映画。私が、この映画を金曜ロード

ショーで初めて観たとき、涙が止まらなかった。普段、戦争や争いごとの映画にはあまり興味がなく、あまり目を向けなかった。だが、この映画は友達がおすすめてくれたり、人気な俳優が出演していたりして、観てみようと思った。戦争の話というとなかなか印象があるが、この話は自分と同じ女子高校生が主役で、親近感をもって観ることができた。だから、現代の高校生はあまり戦争に関心をもっていないことにも初めのシーンで表されていて共感したし、あまり関心がないからこそ、この映画を見て当時の人たちの辛さを知るべきだと思つた。よくテレビのニュースや学校の学習などで戦時中の人の気持ちを理解しよう、とか、当時あったことを永遠に忘れないようにしようとかたくさん言われるけれど、実際、素直にそれを受け止め実行する人というのはごく僅かで、それは戦争を実際に体験した人か、その家族だと思つた。みんな一瞬は受け止めるけれど、ずっと心の中には残っていない。この映画を観たからといって、実際に体験したわけではないけれど、もし自分が百合と同じ立場だったらと考えることはできる。感情を共有したこの映画の内容は、きっと忘れることはない。

私がこの映画で一番感動したところは、特攻隊の出撃が決まったとき。もし自分の大切な人が特攻隊で、明日出撃すると言われたら百合のように必死で引き止めると思つた。出撃すると決まっても変わらない特攻隊員の表情に、尊敬した。ほんとうに覚悟をもっていたんだなと思つた。板倉が逃げたのも納得でしかない。十八歳で特攻隊になり国を背負って死ぬのは、とても辛いと思つた。若い人にそんな覚悟をさせていた当時の日本はほんとうによくなかったと思つた。今も、各国で戦争が続いているけれど、一回冷静になって、人の心というものを取り戻してほしい。国によって言語は違うが、みんな一人の人間なのだから、平等に、平和に暮らせる世界になつてほしい。この映画はそのようなことを思わせてくれた。そして、この気持ちを一瞬でなく長く保つていけるように努力したい。

映画を見た感想

大町岳陽高校 一年 山岸 やまぎし 蒼空 そうら

この映画を見て、命の大切や戦争の悲惨さを学び、改めてつらい歴史があつたんだなと思ひました。

最初の頃の主人公（百合）は周囲のすべてにイライラしていて、家族の状況に不満を感じていました。母と喧嘩して家を抜け出し、近くの防空壕跡に逃げこみますが、目が覚めると戦時中の日本にタイムスリップしてしまいました。具合が悪くなつたところを彰に助けてもらい、百合は食堂で働くことになりました。ここでの百合はタイムスリップしたことに驚き、とまどいつつも彰や鶴さんに優しくしてもらい、状況を受け入れていきました。しかし、彰とその仲間が特攻隊であることを知ると、それに対して強く反対しました。自分もこのような作戦には反対です。実際に知覧特攻平和会館に行ってみました。そこには、特攻作戦の歴史や兵士の写真、遺書や遺品などが展示されていました。特攻をした隊員の多くは二十歳前後で、最年少だと十七歳だったということを知りました。自分と年齢が近い人たちが戦地に赴いていて、その人数が六千人近くもいるというのは現在の平和な生活からは考えられませんでした。映画にもありましたが、今と昔では価値感が違い、国や名誉が命よりも大切なものだったと学びました。ですが、知覧特攻平和会館の遺書には家族あてに「また会いたい」といった内容のものが多かったことがとても印象に残っています。また、遺詠には、「桜」という表現をしたものが多かったです。これは、自分たちの運命をきれいに散っていく桜に例えたのだと言われています。そんな思いの中、国や名誉のために命をかけるというのはとても残酷だと感じました。このようなことが今後起きないようにするためにも、もっと歴史を学んで、戦争をこれ以上しないことが大切だと思ひました。

これまで戦争について深く考えることはあまりありませんでしたが、映画を見たり歴史を学んだりして、今の生活がとても幸せであることを知ると同時に、二度とこんなことを起こしてはいけなないと思ひました。国や

周りの人に縛られないような自由な選択ができることがどれだけ大切なことなのかを学ぶことができました。

「相手の気持ち」

大町岳陽高校 二年 藤原 悠莉

私は「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」を見て人の命の大切さや、どんな時代でも人が人を思う気持ちを守ることの大事さを感じた。戦争の中で生きる人たちの姿を通して、人権という言葉の重さを改めて考えるきっかけになった。

戦争という状況では人の命や自由が軽く扱われてしまうなどの本来あってはいけないことが存在していた。しかし、私はどんな人にも「生きる権利」「自分の思いを持つ権利」があるとと思う。映画を見ながら戦争によつてその当たり前の権利が奪われる悲しさを強く感じた。人が人を差別したり、傷つけたりすることがどれだけ残酷なことなのか、胸が苦しくなった。

特に印象に残ったのは花の丘のシーンで、咲いているのが主人公の名前と同じゆりの花だったのがとても素敵だった。また、花から「希望」や、「命の尊さ」「平和」などのメッセージを感じた。

この映画を通して、私は「人権を守る」というのはただ難しい言葉ではなく「相手の気持ちを大切にすること」という身近なことから始まるのだと気づいた。主人公が特攻隊の人に対して「間違っている」という言葉を発し、怒鳴られているシーンでそれが当てはまると思い、大切なメッセージが隠されていたと思った。今の時代でもSNSでの言葉の暴力やいじめなど、人の心を傷つける行為が行われ、そういう場面でこそ人権を意識して行動することが大切だと思った。平和や人権は、昔の人が苦しみながら守ってきたからこそ、今の私たちが当たり前のように生きられている。だからこそ、私はこの「当たり前」を大切にしていきたい。また、私は「誰かのた

めに行動できる人間になりたい」と思った。そこまで難しいことではなく、困っている人に声をかけたり、ちがう考えを否定せずに受け止めたりすることから始められると思う。そして、家族や友達などの人の命や気持ちを感じながら一日一日大切に生きていきたい。

今こうして生活できていること

大町岳陽高校 二年 赤羽 瑠実

この映画を見るのは今回を含めて二回目、自分の中では「もう一回見るとしな」と思っていました。でも二回目だからこそ今回見ていて、改めて今のこの生活がなに不自由なくできている事を考えられました。

自分とほぼ変わらない年の子が飛行機に乗って突撃し、お国のためにとやって命を燃やすことは、戦争の時代では、誇らしい事だったのかもしれない。しかし、今は生きている人たちが戦争のために自分を犠牲にしろと言われてもできるはずがない。今を生きている私たちだけではなく、戦争の時代に生きていた人だって、絶対に誰しもが犠牲になろうとは思わないだろう。

また、今の時代でも、昔の時代でも、誰しも大切に思う人がいるはず。今は「いつてきます」の言葉はそこまで重くないだろう。でもそれは、今こうして生きられているからであって、戦時中はその言葉がどれほど重かったのだろう。戦時中に生きてた訳ではないけど、その一言が最後の言葉だったり、もう聞けないと思うと、とても悲しくなったり、悔しい気持ちになる。

戦時中の人達があんなにも毎日に怯えたり、苦しい生活をしていたのに、今の自分はこんなにも緩く生きていいのか。そんな風にも考えることができた。戦時中の人達からすれば、平和な未来を願っていたはずだ。しかし、平和の中から少しずつ緩みが生まれてきているのではないかなと思った。

平和なのはいいことだ。戦争がないこともいいことだ。でも同時に、戦争の記憶や思いなど、伝える人が高齢になっていき、伝わりにくくなっているのではないだろうか。実際、空襲の被害があった広島や長崎などは伝える人は多くいると思う。けれども、空襲の被害の小さかった所では、戦争の怖さや思いを伝える人が少ないのではないかと思った。

だから、私は平和という言葉にとらわれるのではなく、いつでも危険と隣り合わせである事を忘れず、戦争への記憶もつないでいけるよう自分も気を引き締めて生活していけたらと思う。

編集後記

次代を担う児童・生徒に、人権尊重の重要性について理解を深め、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的に、今年度も人権課題についての作文・ポスターをお願いしました。こうした作品を集録した作品集も、回を重ね第四十八号となりました。

応募作品は、いずれもみずみずしい感性に富み、純真な感覚で人権課題を捉えたものばかりで、真摯な姿勢に心を打たれるものがあります。これは、身近な生活の問題と関連づけて学習してきた、学校人権教育の成果の現われであると思います。全教育活動を通して、市内の保育園や認定こども園、小中学校、高等学校で人権教育の取組みを行っています。

作品を通じて伝わるメッセージは、私たち一人一人が尊重され、平等に扱われるべきであるという重要なテーマを思い起こさせてくれます。地味であろうとも着実な取組と実践を継続する事が、「一人一人が平等で尊重される社会の形成」に通ずるものと考えます。

貴重なこの作品集を広くご活用いただき、人権尊重の意識が更に大きく広がることを願ってやみません。

発刊にあたり、ご参加いただいたすべての児童生徒の皆さん、様々な面からご協力、ご尽力いただきました、各校の先生方に心から御礼申し上げます。

令和7年度（第48号）

小・中・高校生による

ヒューマンライツ

～人権教育作品集～

編集・発行／大町市教育委員会
TEL 0261-22-0420

発行日 令和8年2月

印刷・製本／有限会社 北辰印刷
TEL 0261-22-3030
